

道徳だより

どう Do 徳 ?
どう 説く ?
どう 道 talk .



テーマ：道徳科って、どうして必要なのでしょう？

令和 6 年 6 月
京都市立道徳教育研究会
広 報 部
(第 1 号)

道徳科は、どうして必要なのでしょう。 「道徳科の目標」は、学習指導要領などに明示されています。

特別の教科 道徳 「道徳科の目標」

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、①道徳的諸価値についての理解を基に、②自己を見つめ、③物事を多面的・多角的に考え、④自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。



こんな経験ありませんか？

Aさん： 雑紙を捨てようと思ったら……箱の中いっぱいだ。
新しい箱と交換した方がいいだろうけど… (めんどうだなあ…)
自分は、1枚捨てるだけだし… (他にもやることあるし…)

(…このまま入れちゃえ)

あ、雑紙の箱はパンパンになっている！

(— 3分後 —)

(ガムテで留めて…) OK、倉庫に運びにいこう

道徳科は、AさんやBさんを自分と重ね (自我関与) (②自己を見つめ)、この行為をいろいろな切り口から捉えようとし (③多面的・多角的に考え)、AさんやBさんの行為の意義や大切さを理解 (①諸価値) した上で、自分はどう在りたいかを考える (④自分の生き方について考えを深める) ものと言えます。こうした過程を経て、上の例であれば、「やっぱり、こうした方がいいよね」(道徳的な判断力)、「放っておいたら気になる」(心情)、「自分がすっきりできるようにしていこう」(実践意欲と態度) など「よりよく生きようとする基盤」を、少しずつ少しずつ、義務教育期間9年間をかけて培っていこうとする、我々大人側の意志と根気が大切な教科であると思います。

道徳教育は「教育活動全体」で行われるものです。しかし我々大人も、1人1人、感覚や環境は異なります。例えば、休み時間の出来事でも、C先生は「気になる、これは教え(伝え)なきゃ」と思える出来事があったとしても、D先生は「気にならないし…」と児童が「知り、学ぶ」機会にならないこともあるでしょう。つまり、全く悪気も、怠慢もないにも関わらず、指導者(大人側)の感覚一つで児童の学び、知る機会を奪ってしまう可能性があるということ

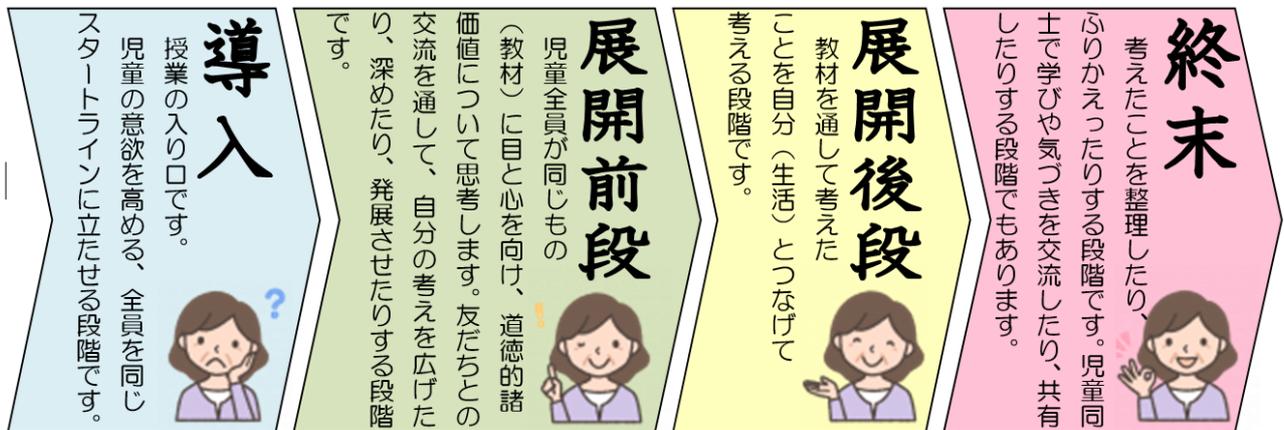
です。そういう点で考えてみると、「子ども全員が必ず出会い、思考し、判断できる機会」を設けているのがこの「特別の教科 道徳」と言えるのではないのでしょうか。

道徳科における「内容項目（以下参照）」とは、つまり子どもたちに「出会わせたい、大切なこと」をジャンルに分けてまとめてあるものと言えます。だから、1つの項目も落とさないように、1年生は34時間、2～6年生は35時間を使って取り組む必要があるのだと言えます。



そして、そうした道徳科の授業は、大きく分けて4つのまとまりで構成します。

道徳科の授業の流れとその内容（4つのまとまり）



「道徳科」は、「公式を知っている」「漢字に詳しい」とは少し異なり、全ての児童が「自分なりの考えをもつ」ことで「同じスタートライン」に立ち、それぞれの視点から思考し、判断し、交流することで互いに考えや思いを共有し合うことができます。「そういう考えもあるのか」「いいな」と知ることの楽しさや面白さを感じたり、「そう思っていたのはわたしだけじゃなかったんだ」「・・・え？そんなことありえないよ」と、自分と他との共通点や相違点に気が付ける機会になったり、考え方が大きく変わったりする機会につながるかもしれません。そう考えてみると、1週間に1時間の道徳科が今より大切に思えたり、「集団の中で、よりよく生きるために大切な教科だなぁ」と思えたりしてきませんか。1週間に1時間しかない、点数化もされない「特別の教科」、ぜひ子どもたちの心に残る時間につなげてあげてください。